

ナイルの至宝、古代エジプト文明の遺跡を訪ねて⑤

(2月9日)

12日目だ。今日の朝はゆったりとダハベイヤで過ごす。そのうちにガバルエルセルセラと呼ばれる古代の石切り場に到着する。古代のエジプト時代、ここから切り出しナイル川を使って運搬し、神殿等を建築したという。何と今と変わらないではないか。

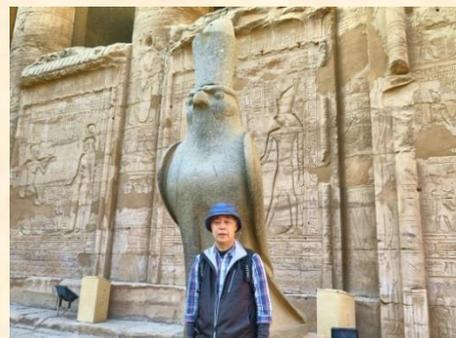


ここでは、最初に左右を切って、次に奥から切って前へ倒す方法だと磯部さんから教わった。こんなところは普通のツアーでは来ないだろう。かなり奥の方まで進むと、ここから切り出したとすぐにわかる場所に出た。切り出された後の岩山が迫ってくる。



午後にはエドフのホルス神殿を訪れる。海岸につくと馬車が並んでいる。神殿までは馬車で行く。しばらく乗っていると神殿に到着する。

ここは、ハヤブサの神ホルスに捧げられた神殿だ。この神殿では建物のあちらこちらに、ホルス神のレリーフが見られた。第一列柱の柱上には、パピルスモチーフにした装飾が施されている。



至聖所の前室の天井は黒く、かつてコプト教徒が使っていたという。また、中には大きなホルス神像が立っていた。

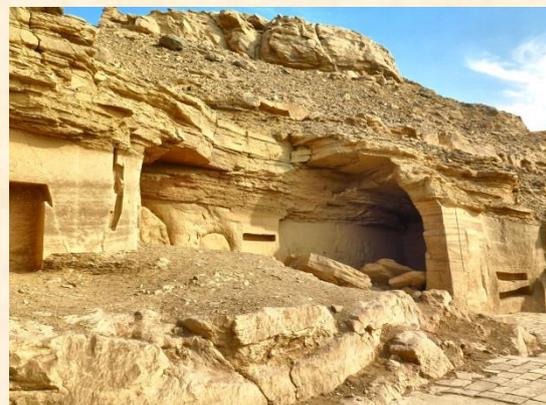
ホルス神殿を見学した後、ダハベイヤに戻る。夜はアスワンで買ったガラベイヤを着て、王様気分。王様、王妃パーティーの始まり・・・。



(2月10日)

13日目、ああ今日で最後か。もう少しダハベイヤに乗っていたい。ゆったりとナイル川のクルーズを楽しむのは最高の気分だ。天気も良く日の出が眩しい。

今日もツアーではあまり訪れないエルカーブを見学、このあたりは貴族の岩窟墓があり、4つ公開されている。中には保全状態のよいレリーフが残っていた。当時の生活の様子などがわかる貴重な遺跡だ。岩山の中腹にはいくつもの岩窟墓があるのがわかる。



再びガラベイヤに戻り、今日は早めの夕食をとる。すると船員スタッフの皆さんが最後のパーティーを催してくれ、大いに盛り上がった。

その夜はガイドのムハンマドさん(愛称ハマちゃん)が是非自宅へ来てもらいたいという。ご厚意に甘えて訪ねるとハマちゃんの家族が出迎えてくれ、おもてなしを受けた。

途中ハマちゃんの親戚が営む香料の店へも連れて行ってもらった。ハマちゃんありがとう。忘れないよ。

最後のガラベヤから見た、ルクソールの街の夜景は格別だった。



(2月11日)

今日は、最後の見送りを受けて、ルクソール空港へ。ここからカイロ経由で帰途につく。長いようで終わってみれば短く感じたが、内容の濃い充実した旅となった。村治先生、磯部先生をはじめ一緒していただいた方々、そしてマフムートさん、ガイドのムハンマドさん、サラハ・アミンさん、本当に有難うございました。

今回の旅では上エジプト、下エジプトの色々な神殿やお墓などの遺跡群を見ることができた。「百聞は一見にしかず」である。いくつかのピラミッドや神殿のレリーフ、壁画を目の当たりにして、古代エジプト文明の素晴らしさを実感せずにはいられなかった。

古代エジプト人は、生活の中に自然や身近な動物などを神々として取り入れ、そして崇めていた。それは「ナイルの賜物」と言われる環境の中で培われた生活の知恵だったかもしれない。まさに自然の中で自然とともに生活していた。そして上・下エジプトが統一、分裂を繰り返す中で、偉大なファラオは、絶大な権力を持って国を統一し治めていたのだ。
世界遺産条約の理念のきっかけとなったアブ・シンベル神殿が、ここに存在したのも決して偶然ではなかったような気がする。

隆盛を極めた古代エジプト文明もやがて、他国の侵略をうけるようになり、古代ローマ帝国の支配下に入る。その後幾多の歴史を経て現在に至っているが、現存する古代エジプトの遺跡は永遠の宝物であり、将来に向けても守っていかねばならないと改めて強く感じた。

帰りの空路では、疲れていたせいかぐっすりと眠りこんだ・・・・・・・・。

自宅へは翌日の夕刻に着いた。早速汗を流そうと、浴室に入ったら何故か浴槽が「白い石棺」のように見えた。(笑)

(おわり)

(参考図書)

地球の歩き方編集室「地球の歩き方 エジプト」2014～15 (ダイヤモンド社刊)

松本 弥 著「図説 古代エジプト誌 古代エジプト美術手帳」(弥呂久刊)

2012年開催「大英博物館古代エジプト展」資料 「「死者の書」のひみつ」

「王家の谷の案内」*現地で購入

雑誌「Pen 2017年1/1/15合併号 古代の美を探して、エジプト」(CCCメディアハウス刊)

「すべてがわかる世界遺産大事典<上><下>」(NPO 法人世界遺産アカデミー刊)

蔵持 不三也 監「神話で訪ねる世界遺産」(ナツメ社刊)